
実践報告

テレビ番組を活用した英語授業の展開（第2報） ー食育番組をリスニング素材として使用した授業実践をもとにー

Activities in English Lesson using TV Programs (Part 2)

竹 中 麻美子

Mamiko TAKENAKA

概 要

英語学習において、学生の興味・関心を惹くような教材を使用した授業展開についての実践報告の第2報である。

リスニング教材として、英語圏で放送されたテレビ番組の中から学生の専門分野に関する番組やシーンを選んで使用することで、学生が英語学習に対し意欲的になることが明らかになった。今回取り上げたのは、「学校給食」をテーマとしたドキュメンタリー番組である。食物栄養科と保育科の学生が履修する英語の授業の教材の一つとして使用した。リスニング教材としては難易度が非常に高いにも関わらず、多くの学生が積極的にリスニングに取り組み、学生同士で協力しながら内容の理解に努めた。

1. はじめに

高校までの英語教育をふまえ、大学での英語教育には専門職に向けての発展的な力が求められている。小池（1993）は大学での英語教育は「一般的共通な英語力のほかに、専門的職業に備えてのさまざまな英語力をつけるための最後の学校教育」（p.249）であると述べている。大学での英語教育は専門分野に関するボキャブラリーのみならず、その分野に関する知識や考え方なども含められ、英語を使っの課題の捉え方、問題意識の表現方法など、時には物事を批判的にとらえる力も必要となる。

テレビ番組は、「効果的に演出、編集され、視聴者に向けての強いメッセージ性を持つ」（竹中、2018, p.153）。大学生や短大生が英語を学習する方法として、専門分野に関する内容を含んだテレビ番組を教材として取り上げることは学生の意欲

向上に大きな効果が期待できる。

第1報では食物栄養を学ぶ学生が興味や関心を持って取り組めるよう、料理番組を教材として使用した授業実践について報告した。イギリスの食文化の一つであるテイクアウトの中華料理についてリスニング教材を作成、会話上手な番組プレゼンターが、視覚的にもわかりやすく食事の塩分、糖分、油脂を提示することで、ネイティブ向けの番組にもかかわらず、多くの学生が難しい英語リスニングにも取り組み、自身の食物栄養に関する知識を基に、イギリスのテイクアウト食品の問題点を理解することができた。

第2報となる今回は、食物栄養と保育という二つの学科にまたがるテーマ、「学校給食」についてのドキュメンタリー番組を教材として使用した授業実践について報告する。授業を受けた学生からの声を取り上げながら、外国語の授業における視聴覚教材としてのテレビ番組の有益性とそれを

効果的に使用する授業展開について明らかにしていきたい。

2. 方法

Y短期大学食物栄養科及び保育科1年生計130名が受講した英語の授業を研究対象とする。第1報と同様に、英語圏で制作、放送された番組を視聴覚教材として取り上げる。番組冒頭の導入部分を穴あき教材として作成し、リスニングに挑戦する。時折学生同士で教え合い、学び合う時間を設けることで英語が苦手な学生も教材に対する興味を失うことなく学習に取り組むことができるよう努めた。その後、教材に取り組んだ成果や内容を理解しての感想等を自由に記述してもらう形で授業を行った。

今回この授業実践で使用したのは、2005年イギリスの民放ITVにて放送された「学校給食」をテーマとするドキュメンタリーである。タイトルは「Jamie's School Dinners」で、人気の若手シェフ、ジェイミー・オリヴァーが子どもたちの未来を考え、ロンドン近郊の学校の給食改革に挑戦する内容である。番組放送当時、イギリスの学校給食は非常に大きな問題を抱えていた。「学校給食は、1980年代の民営化をきっかけに急坂を転がるように質が落ち、伝統的な料理が姿を消してファーストフード型のメニューが主流となっていた。」(阿部, 2005, p.274)。食育を考える教材として、福野(2012)はこの番組DVDについて次のように述べている「食育の推進が今日的な課題となっている。なぜ子どもの頃からの食育が必要なのか、日本にいる私たちにも改めて考えさせる作品である」(p.27)。食物栄養を学ぶ学生、保育を学ぶ学生、ともに自身の専門として学んだ内容を基に考えることのできる視聴覚教材としてふさわしい番組であるといえる。

全193分、4回にわたって放送された長いドキュメンタリーであるが、この番組の内容を効果的に編集し、端的にわかりやすく紹介しているのが番組冒頭部分である。この短いイントロ部分を一部省略し、穴あきのリスニング教材として作成した。主人公ジェイミーが明るく開放的な学校の食堂で小学校低学年と思しき子どもとともに給食を食べている。しかし、その食材に疑問を持つ彼は、学

校給食の改革に乗り出す。しかし、問題は山積、それでもあきらめることなく子どもたちのために学校給食を変えていきたいと語るジェイミーのインタビューとナレーションの音声を約1分間のリスニング教材に編集した。

たとえ一部分であったとしても、一般的な英語リスニング教材と違い、英語ネイティブに向けた番組に収録された英語音声をリスニングすることは、普段英語に触れていない学生にとっては大変難しい作業となる。だからこそ、聞き取ることができた喜び、内容を理解できた際の充実感は非常に大きなものとなる。自身の力で聞き取り、理解した番組内容を踏まえ、自分がどう考えるのか、自分の意見を持つことがテレビ番組を素材として取り上げることの大きな理由である。

(1) この授業を行うまでの準備

このテキストのジェイミーの発声は、典型的なイギリスの若い世代の英語で、「大衆的なイギリス英語の聞き取りの難しさの大きな要因」(小川, 2012, p.37)とされる語中の[t]発音の代用、喉を閉めるような音が頻繁に登場する。標準的なイギリス英語とされるReceived Pronunciation(容認発音)の硬く、はっきりとした[t]と全く違う音である。いきなりこのような発音を耳にしても学生は混乱するので、事前にイギリス英語の発音の特徴を、学生がより聞きなれていると考えられるアメリカ英語と比較しながら紹介する必要がある。

その際に取り上げる教材の一つが「Twinkle Twinkle Little Star」という英語の歌である。これは、子どもたちに親しまれている童謡「きらきら星」の原曲である。この歌を英語のテキストとして授業で取り上げた際に、「Little」という単語の発音を3種類学生に解説する。典型的なアメリカ英語では、小川(2006)の述べるように[t]の有声化が起き、[t]が[d]や「ラ」行子音に変化し、「リ^ルー」のように柔らかい響きとなって聞こえる。一方、代表的なイギリス英語では[t]の有声化は起こらず、はっきりと発音されるため、「リ^トウ」のように硬く強い響きとなる。そしてもう一つが、イギリス南部の若者が話す英語の特徴である[t]を落とす発音であり、「Little」が「リ・^ウー」のように聞こえる。歌をテキストと

してこの3種類のLittleの違いを解説すると発音の違いに興味を持つ学生も出てくる。

英語能力判定試験「TOEIC®テストなどでもイギリス英語が取り上げられるようになり」(小川, 2012, p.34)、ひと口に英語と言っても様々な発音の特徴がある。イギリス英語の発音の特徴を事前に知っておくことは、番組を視聴し実際のイギリス英語をリスニングする際にも大いに役立つ。

(2) 実際の授業の手順

- 1) まず授業の導入として、番組についての簡単な解説を行い、学生自身の「学校給食」についての共通理解を図る。
- 2) 今回取り上げる英語音声的文章化した穴あきテキストを配付、不明な単語等をクラスメイトと教え合うなど協力しながら調べる時間を設ける。
- 3) リスニングに使用するシーンを含んだ番組冒頭部分を視聴する。日本語字幕等使用せず、

内容については映像・音声を邪魔しないよう、教員が簡単に訳しながら紹介する。

- 4) 音声のみを取り出したものを、何回か(3回程度)繰り返し聞く。
- 5) 一旦2分程度のブレイクを入れる。この間に周囲のクラスメイトと聞き取った単語(またはその一部)の教え合いなどをする。
- 6) 再度英語音声の聞き取りを行う。5)で特に聞き取りづらいという声が上がった場面を繰り返し再生する。
- 7) 聞き取った英文の内容を、番組の雰囲気に合わせた言葉を使いながら訳していく。
- 8) 声に出して読む。
- 9) 再度音声を聴く。
- 10) 内容を理解した後、自身の学校給食についての経験をふまえ、今回視聴した内容についてのそれぞれの感想や意見を記述する。

3. 結果と考察

表1 授業で使用した英語表現(番組冒頭部分)

Jamie : What on earth is that?

Child : I think it's a fish or a chicken foot.

Jamie : I honestly, honestly, have no idea what is in that. Look at us, we are in a beautiful room surrounded by beautiful children, innocent, pure. Their bodies and their bones are growing up. Most important time of life. And you know, and they're being fed this. It's not right. (略)

Narrator : School dinners are in a deepening crisis, with a diet of fatty processed foods threatening our children's health. (略) The government doesn't seem to have the answers. So Jamie Oliver wants to prove that they can be better by transforming what kids eat at school. (略) And all on a tiny budget.

Jamie : I've never ever bang my head, my head against the wall so many times.

Narrator : Can Jamie Oliver change what Britain's kids eat at school?

Jamie : I'm doing this because I want the kids to eat better food. I want the kids to be healthier. I want them to grow up with better habits.

(筆者訳)

ジェイミー：これ、一体何だろう。

子ども：魚か鳥の足だと思う。

ジェイミー：俺、正直言って、本当に、この中に何が入っているか、全くわからないんだよね。

見てよ、こんなにきれいな所で、こんなに無邪気で純粋で、素晴らしい子どもたちに囲まれて。

この子達の体と骨は今、まさに成長期にあるんだよ。人生で一番大事な時じゃないか。

それなのにさ、こんな食事を与えられてるんだよ。こんな間違っているって。

ナレーター：学校給食は今、危機に瀕しています。脂肪過多の加工食品が、子どもたちの健康を害しているのです。しかし、イギリス政府は解決策を見出せていません。

そこで、ジェイミー・オリヴァーが、子どもたちの学校での食を変えることでこの状況を改善しようとしているのです。ほんのわずかな予算のなかで。

ジェイミー：こんなに何度も、何度も壁にぶちあたるなんて。

ナレーター：はたしてジェイミーは学校給食改革を成し遂げることができるのでしょうか。

ジェイミー：俺がこの活動をしている理由は、子どもたちにもっといいものを食べて欲しいからなんだ。

もっと健康になって欲しいからなんだ。もっと良い食習慣とともに成長して欲しいからなんだ。

下線部が穴あきで、語群はなし。

(1) 導入について

まず授業の導入として、「学校給食」に関するイギリスの番組を視聴することを学生に話し、自身の学校給食に対する思い出を聞いてみたところ、「給食の時間が楽しかった」、「給食はおいしかった」と答える学生が大半を占めた。この時点で、多くの学生が、給食というものは、専門家がしっかりと栄養について考えてくれていて、調理担当者が心を込めて作ってくれているものであるから、おいしくて当然である、という認識を持っている

ことがわかる。このような日本での給食についての認識があたりまえではないことが、この英語教材を学ぶことで明確となり、食に対する文化の違いを理解することにもつながる。また、学生がこれまでに経験したさまざまな実習における給食の時間を思い出してもらうことで、将来の自分が子どもの食や給食と何らかの形で関わることになるという意識も持った上で教材に取り組むことも効果的な学習につながると考えられる。授業後の感想からは、日本の給食と比較した記述が見られた。

表2 学生のコメント①（抜粋）

- ・世界の学校給食を知れたことが良かった。日本の学校給食がとても恵まれていることが映像を見て改めて感じることができた。
- ・日本の給食の在り方が、他の国でも当たり前だと思っていたので、改めて日本の給食は恵まれているんだな、と思いました。
- ・日本とイギリスの学校給食はこんなに違うのかと改めて感じることができました。子供達の健康にも関わる給食があんなに偏ってるなんて思いませんでした。あの後イギリスの学校給食がどのように変わっていくのかとても気になります。
- ・国によって食に関する考えは違うのだと改めて感じました。日本の給食は栄養バランスが良く考えられていて学校給食を子どもたちのために変えたいと努力しているジェイミーのことを知りつつ、同時に英語も学べたので教科書やテキストで勉強するより楽しく学べた。
- ・実際の外国の状況を理解し、日本との違いに驚くこともできて、とても興味が湧き意欲的に授業を受けることができた。
- ・私達の食べてきた給食は、バランスが良く栄養面も計算されていて、当たり前のように美味しく食べていたが、他国と比べると随分恵まれていたのだと感じた。

学生自身が日本以外の学校給食についての関心を持ち、番組の内容に大いに興味がわいた状態で実際にリスニングに取り組んでいたことがわかる。

(2) 教材としてのドキュメンタリー番組

まず最初のリスニングで、ほとんどの学生が、英語が速すぎて何を言っているのかさっぱりわからない、と口々に言う。英語学習者に向けゆっくりとしたスピードで話された英語に慣れた学生にとっては信じられない速さである。ネイティブに向けた放送なので、聞き取れないのは当然である。しかし、内容を知りたい、だから難しくても挑戦したいと感じてもらえるかどうか重要である。その際に、映像は大いに助けになる。学生が視聴

する冒頭部分だけでも、番組を象徴する様々なシーンで構成されている。笑顔で給食を食べる子どもたち、その横で不満げな表情を浮かべる主人公ジェイミー・オリヴァー、給食にもかかわらず、ただのジャンク・フードにしか見えない食材も大きなインパクトを持つ。給食改革を進める中でいろいろな壁にぶつかり、苦しそうな表情で弱音を吐くようになる主人公ジェイミー、それでもあきらめず食に対する熱い思いを語るシーンと短いながら効果的に編集されたカットが次から次へと登場する。カメラを見据えて本音を語る主人公に共感することで、学生はテキストの内容をしっかりと理解したいという気持ちを持つことができるのである。

表3 学生のコメント②(抜粋)

- ・映像があると自然と興味がわくし英語も耳に入ってくるからいいと思った。
- ・音声だけだったり、映像と一緒に何度も聞くことで最初はわからなかった単語が聞き取れることができ、空欄がどんどん埋まることで楽しいとも思いました。このような日本と違った外国こと理解できるような教材を使った授業をもっとしたいと思いました。ネイティブな英語の聞き取りができる他に、たくさん学べることもあるのでいいと思いました
- ・今回の授業は映像があったり、ドキュメンタリーだったりして楽しく取り組むことができました。

(3) リスニングの内容と理解

非常に早いスピードで話されている英語ではあるが、繰り返し聞いているうちに、テキストのどの部分を読んでいるのかわかるようになり、単語の一部の音声をキャッチすることができるようになってくる。特に、ナレーション部分は典型的なイギリス英語で、滑舌よく発音されているので慣れてくると聞きやすいリスニングである。テキストの穴あきの部分ははっきりと発音されている単語を選んだ。また、一般的なイギリス英語とイギリスの若者英語との違いを比較しやすいよう、health (healthier) や better など、ジェイミーとナレーターが共通して使用している単語を取り上げた。授業の展開によっては、ナレーション部分から聞き取りを始め、続いてジェイミーの話す音声へと難易度の順でリスニングを進行した。

音声はほとんど会話なので、言葉の繰り返しなどの会話独特の表現がジェイミーの語りには多く登場する。しかし、時にはいい直しながらも情熱的に語るジェイミーの姿を映像を通して目の当た

りにすることで、学生は彼の言うことを理解したいという気持ちを持つことができるようになるのである。

テキスト冒頭の I honestly, honestly, have no idea what is in that. 「俺、正直言って、本当に、これの中に何が入っているか、全くわからないんだよね。」という部分も、honestly が繰り返されることで彼の気持ちが強められているのがわかる。映像では実際に that に当たるナゲット(と思しき食材)の感触を確認している彼の困惑した表情が大変印象的である。学生は、リスニングをし、内容理解をすすめると、料理人であり食のプロであるジェイミーがその正体は何なのか全くわからない、理解不能な食材が子どもたちの学校給食として提供されているということを知り、少なからずショックを受ける。学生からは次のような感想が寄せられた。

表4 学生のコメント③-1 (抜粋)

- ・料理人のオリバーでも中身がなにが分からないのは健康にも良くないと思った。
- ・イギリスの給食は日本の給食に比べて、揚げ物だったり加工食品ばかりであまり美味しくなさそうだった。
- ・イギリスの小学校でこんなに悲惨な給食が出されているのは知らなかった。
- ・今回海外がこんなに栄養バランスのとれていない給食を食べていたと知り、すごく心が痛くなりました。
- ・イギリスの給食は、子供達の発達にとって良いものではなくて改善しなきゃだめだと思いました。
- ・小さい頃こそ健康的に育つためにバランスの良いご飯を食べるべきなのに、見るからに体に良くなさそうな給食をためらいもなく食べている子ども達に驚いた。

テキストを日本語に訳す際には、プレーンな表現ではなく、生き生きとした会話文にして訳すことで、「気さくなトークで料理を紹介する」若き人気シェフ、「ひと言で言う『愛情深い熱い男』」(杉山, 2017, pp.8-9)であるジェイミー・オリヴァーの人となりまで学生に伝わるよう努めた。そうす

ることで、ジェイミーの給食改革への熱い思いが彼自身の語る言葉で学生にも伝われば、外国語を本当に理解した、と言えるのではないかと考えた。子どもの食に対するジェイミーの情熱に関するコメントも寄せられた。

表5 学生のコメント③-2 (抜粋)

- ・子供たちのために学校給食を変えているのに、子供たちに食べてもらえなかったり、捨てられてしまったりそれはすごい悲しいし、たくさん悩み、苦しんだのかなと思った。でも、子供たちのことを考え、一生懸命考えてみんなから認められるように頑張ってるのが伝わってきた。イギリス政府でも解決できなかったことをジェイミー1人でやろうとしたことをすごく尊敬しようと思った。少しでもこのように健康的な給食を子供たちに食べてもらいたいと思った。私も保育士を目指している立場として、子供たちのことを第一に考えたいし、ジェイミーオリバーのようにたくさん子供たちのことを思いやれる保育士になれるよう頑張りたいと思った。
- ・(子どもたちの不健康な)食生活を変えようと取り組むジェイミーは素晴らしいと思った。どこの国の子ども達も、健康的な食事をし、元気に育っていけるような世の中になれば良いと感じた。

(4) リサーチタイムの挿入

また、授業において大変効果的であったのが、リスニング途中で挿入されるリサーチタイムと呼ぶブレイクである。学生が近くのクラスメートと会話しながら学習を深めるアクティブラーニングの時間であり、ここで教員が学生のリスニングの

状況を確認しながら巡回することで進行の度合いを確認し、後半のリスニングを効果的に進めるヒントを学生に与えることができる。この時間が学生にとって有益であったことが、以下のコメントから明らかになった。

表6 学生のコメント④-1 (抜粋)

- ・自分では理解できなかったところやわからないところなどを周りの友達と話し考えることで、自分の考えの他に友だちの考えを知ることができたり、理解を深めることができたのでよかったです。早い英語の会話を聞くのはとても難しいと思いましたが、何回も繰り返し聞き、耳を慣らすことが大切だと感じました。
- ・リスニングは苦手だったのでジェイミーの会話を聞き取ることは難しかったけどresearch timeで力がついたので良かったです。またこのような授業をしたいです。

- ・友達との意見の交換で、わからない単語を教えてもらったり、自分の意見について話せたりと、とても良い時間だと感じました。日常会話で使われるように英語を聞くことができたので、普段とは違う学習ができたと思いました。
- ・まだまだ聞き取るのは難しいけど、友達とコミュニケーションをとりながら意味を理解し合ったりすることもでき学びを深められたと思う。
- ・ナレーターの声はまあまあ聞き取れたけど、ジェイミーは早すぎて聞き取れないし、目で追うのも大変だった。だけどみんなで答えを見つけ出していくうちに、聞き取れるところが増えていった。

リスニングの中で一番難易度が高かったのが、
 "Their bodies and their bones are growing up."
 「この子達の体と骨は今、まさに成長期にある」
 という部分で、何度聞いてもまったく聞き取れない、わからない、という学生がほとんどであった。ただ、途中のブレイク（リサーチタイム）の際に、どこまで聞き取れたか聞いたところ、単語の頭が「p」か「b」に聞こえる、という学生がおり、そこから、この穴あき部分は、どちらも「b」で始まる単語であり、文の後半に growing up という表現があるので、子ども達の「b……」と

「b……」は成長している、という文章になる、というヒントを与えると、"body" と "bone" を想起することができるようになる。リスニングとは聞き取りの力だけでなく、意味のつながりから単語を推測する力も必要であることを学ぶことができ、また非常に難しいリスニングをやり遂げた自信を持つこともできるのである。始めは全く聞き取れなかった単語が、このようなヒントを与えられ、さらに繰り返し聞くことで理解することができ、達成感を味わったという感想も見られた。

表7 学生のコメント④-2（抜粋）

- ・最初はなかなか聞き取れなかったけど、何度も聞いているうちに聞き取れるようになったり、最初の文字のヒントをもらって聞くことにより、最初より単語が耳に入るようになった。ふつうのリスニングより聞き取れた時の達成感があった。
- ・ジェイミーの英語が聞き取りずらく大変でした。しかし、先生や友達と話したりしていくうちに少しだけ分かってきた部分もあったので勉強になったと思いました。
- ・1回聞いてみただけだとやっぱり全然聞き取れないですが、ナレーターはよく聞けば聞き取ることが出来ました。ジェイミーは早いし聞き取りずらいですが聞き取れた時は少し達成感があります。
- ・今までよりも早口でなまりもあり、難しかったですが友達と協力し、理解することができました。授業をきっかけに、世界の食に興味を持ちました。
- ・少しずつですが英語を調べてわかるようになった時が面白かった
- ・1回目に聞いた時はとても英語が早く、聞き取ることが難しいと感じましたが、何回か繰り返し聞くことにより、少しずつですが聞き取れる単語がありました。
- ・いつもとは違った教材で難しかったけど意味を全部理解した時に達成感はあったし、自分の力がつく気がするのととても良かったと思います。
- ・英語の聞き取りは上手いかなかったけど、先生や友達と一緒に学んだ事でジェイミーの子どもたちの成長に対する強い思いが感じられたし、リスニングに少し慣れる事ができました。
- ・英語が速くて最初は全く興味がなかったけど、少しずつ単語の意味や文章がわかってきて、主人公の思いがわかるようになった。主人公の話す言葉が略されていたり、発音が独特だったりして、理解することや聞き取ることが難しかったがみんなで少しずつ読み解いてわかっていくのが楽しかった。

(5) リスニングの成果とテキストに込められたメッセージ

テキスト後半では、ジェイミーが子どもの給食改革への思いを熱く語っている。そのためか、非常に早口になっているので、学生にとってはほぼ聞き取り不能な英語である。しかし、ヒントを与え、教材を工夫することで、学生自身がジェイミーが何を言っているのか知りたい、という気持ちを持って取り組めるようにした。

英語表現としては、非常にシンプルな文章であ

る。「better」という言葉が何度か登場するが、これが「ベター」ではなく、「ベ・ァー」となるのがイギリスの若者の英語発音の特徴であること、それが聞き取れることは英語のリスニング力が上がったということなどを説明すると、そのベターが何を表しているのか興味を持ち、「子どもたちのより良い食、健康、そしてより良い習慣」というジェイミーのメッセージ理解につながる。そして、そのために壁にぶつかっても必死に努力する彼の姿は学生の心に強い印象を残すのである。

表8 学生のコメント⑤（抜粋）

- ・最初は Jamie の文章が難しいなと感じることもありましたが、イギリス英語は *th* を落とすなど理解した後もう一度聞き、1 つ単語が埋められたのでとても達成感がありました。…ネイティブな英語の聞き取りができる他に、たくさん学べることもあるのでいいと思いました！！
- ・オリバーは何度も壁にぶつかりながらも、こどもたちに良いものを食べてほしい、健康になってほしい、より良い生活習慣と共に成長して欲しいという思いが伝わってきた。
- ・給食を改革するための 3 つの理由に心を打たれました。何度も悩み壁に頭を打ちつけても子供たちのことを第一に考えていて感動しました。
- ・より良い食事をしてもらいたい、より良く成長してもらいたい、より良い食生活と共に過ごしてもらいたいという言葉がとても印象に残りました。
- ・Jamie が強い気持ちで学校給食の危機を救おうとしているのが伝わってきて凄い人だと感じました。
- ・ジェイミーの考えはとっても理解できた。英語で苦手意識があったが、内容が興味深く次が気になってしまい、自分から授業に臨むことができた。

4. まとめ

英語を学ぶ学生と教材とが学生の専門や興味、関心によってつながっているかどうかが積極的な外国語学習のポイントとなる。それは、魅力的な内容の教材と、その内容を理解した学生がさらに何かを感じること、意見を持ったり課題を見つけたり、感動したりすることでコミュニケーションが成立するかどうか、ともいえる。コメントの内容から、学生が今回の教材に大いに興味・関心を持って学習したことが明らかになった。

学生が積極的に取り組んだ理由としては、学生自身がこの番組で取り上げられたテーマを自身の専門分野に関わる重要な問題ととらえたためと考えられる。この学習をとおして学生は日本とイギリスの給食環境の大きな違いを知り、日本の食育についても理解を深めることができた。この分野

でのグローバルな視点を身に付けたのである。

学生の専門分野に関わるドキュメンタリー番組は、外国語を学ぶ教材として学生が自身の経験や知識を基に内容を理解し、批判的な問題の捉え方まで学ぶことができる優れた教材であることが明らかになった。今後もそのような教材の開発に努めたい。

参考資料・文献

- 阿部菜穂子2005「イギリスで巻き起こる『給食改革』 - 果たして『民営化の失敗』から立ち直ることはできるのか？」 世界 745号 岩波書店 274-280
- 小池生夫 1993 第8章 ヒアリングの指導 8.3.2
大学におけるヒアリング能力の到達目標 小池生夫編
英語のヒアリングとその指導 大修館書店 249-252
- 小川直樹 2006「イギリス英語発音レッスン」
English Journal December 2006 Vol.36 No.12 47-53
- 小川直樹 2012「イギリス英語丸々リスニング」
English Journal December 2012 Vol.42 No.12 33-45
- 「ジェイミー・オリヴァーのスクール・ディナー Vol.1&Vol.2」2007 アーティストハウスエンタテイメント
- 杉山直子 2017 「テレビの人気者から『食育革命』のリーダーへ」 English Journal December 2017 Vol. 47 No.12 8-9
- 竹中麻美子 2018 「テレビ番組を活用した英語授業の展開（第1報）ー料理番組をリスニング素材として使用した授業実践をもとにー」 山梨学院短期大学研究紀要 39 153-158
- 福野 裕美 2012 「食育の必要性『ジェイミー・オリヴァーのスクール・ディナー Vol. 1 2005年』 映画で学ぶ《教育学》2 26-27 教師教育視聴覚教材研究会
- "Jamie's School Dinners Vol. 1" 2005 Fremantle Media
- Oliver, Jamie 2011 "Jamie's Great Britain" Michael Joseph

本研究は山梨学院短期大学 「人の研究に関する研究倫理審査」において審議され承認された（承認番号：2018024）

